尼崎市立塚口中学校　　平成２４年１月２３日

塚　口

平成23年度
No.14

◆学校教育目標◆
集団の中で自らを律し
目標の実現に向け努力し
自らを高め続けようとする姿勢の育成

「1・17は忘れない」防災訓練　　－ 1月17日 －

阪神・淡路大震災は、平成７年１月17日午前５時46分に発生しました。

17年前の1月17日に発生したわけですが、6,400人を超える人が尊い命を亡くされました。

また、家屋が倒壊し、多くの人が生き埋めになったのですが、その生き埋めになった人の８割が近隣の人々に救出されたということも報告されています。

しかし、10ヶ月前の平成23年３月11日に発生した東日本大震災は、揺れに加え、地震後の巨大な津波により、家が押しつぶされ、産業が破壊され、大切な家族や友達を奪っていきました。今なお、行方不明の方がたくさんおられることも事実です。

私たちは、この２つの震災の教訓を生かして、自分たちにできることは何なのかといということをしっかりと考えて、毎日の生活を送っていかなければならないのだと思います。

富松幼稚園の園児さんやＰＴＡの人たちも参加して、「１・１７は忘れない」防災訓練を実施しましたが、今年は地震・火災に加え、津波の発生に対しての内容も取り入れたものでした。

南海地震（8.4M）が発生した場合、津波の第１波が兵庫県にやってくるのは、地震発生から50～120分後とされ、満潮と重なれば、最高で３ｍも海面が上昇、さらに１時間ほどの間隔で５～６回繰り返すと言われています。

また、１０数分で尼崎に津波が押し寄せ、その大きさは５ｍにも達するというような話も聞いています。

このようなことが言われる中、「何かできることはないですか」という暖かい心、人とのつながりや絆とともに、本当に大切なことの１つに「自分の身は自分で守る」ということがあります。

学校にいる時に災害が発生するとは限りません。登下校中、あるいは家に一人でいる時に発生することも考えられます。つまり、先生の指示を受けてでなく、自分でしっかりと判断して行動しなければならない状況も十分考えれるということです。

本当は、災害に遭わないのが一番いいのだと思いますが、いざという時には、慌てず、冷静にそして、迅速に動くことが重要になってきます。

今回の訓練が、その時だけに終わるのではなく、また、訓練だけで終わるのではなく、「自分の身は自分で守る」ということの大切さをしっかりと認識し、災害遭偶時の心構えをしっかりと確立していってほしいと思います。

阪神・淡路大震災の教訓　　－命の大切さ、助け合いの心－

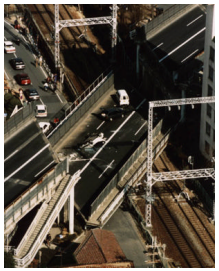
阪神大震災・毎日jp（毎日新聞）より
「1・17は忘れない」学習資料　より

平成7年（1995年）1月17日午前5時46分、兵庫県淡路島付近を震源にマグニチュード7．3、震度7の揺れが、神戸市や西宮市、芦屋市など兵庫県南部の地域を中心とする地域を襲った。6,434人もの犠牲者を出し、約10万4,900棟が全壊、約14万4,000棟が半壊など大きな被害が出ました。阪神高速神戸線の高架橋が倒壊したり、電気、ガス、水道が全面ストップするなど、ライフラインにも大きな被害を与えました。また、地震後には各地で大規模な火災が発生しました。

震災直後、約1,150か所の避難所に約32万人が避難しました。そのうちの約6割の人が学校に避難しました。地震発生から2～3日後には、県内各地や全国から多くのボランティアがかけつけました。被災者たちは、ボランティアに助けられ、励まされながら、お互いに助け合って自分たちの手で避難所の運営を行うようになりました。トイレの清掃や配給物資・食料の配布など、中学生も自分たちでできることを見つけて活動しました。震災の年は、後に「ボランティア元年」と呼ばれるようになりました。

阪神大震災で橋脚ごと横転した阪神高速道路神戸線

西宮市で阪神高速道路が落下、半分落ちかかったバス



阪急電鉄門戸厄神駅南の線路に落下した国道171号線の交差部分

気仙沼市立階上中学校卒業式答辞より　　－平成23年3月22日

今日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか、私たちのために卒業式を挙行して頂き有難うございます。ちょうど十日前の三月十二日。春を思わせる暖かな日でした。私たちはそのキラキラ光る日差しの中を希望に胸を膨らませ通いなれたこの学舎を五十七名揃って巣立つはずでした。

前日の十一日、一足早く渡された思い出の詰まったアルバムを開き十数時間後の卒業式に思い出をはせた友もいたことでしょう。

「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らず。階上（はしかみ）中学といえば「防災教育」といわれ内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。

しかし、自然の猛威の前には人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切な物を容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というにはむご過ぎるものでした。辛くて、悔しくてたまりません。時計の針は十四時四十六分を指したままです。でも、時は確実に流れています。

生かされた者として顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く正しくたくましく生きて行かなければなりません。命の重さを知るには大き過ぎる代償でした。しかし、苦境にあっても「天を恨まず」運命に耐え、助け合って生きていくことがこれからの私たちの使命です。私たちは今それぞれの新しい人生の一歩を踏み出します。どこにいても、何をしていようともこの地で仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。後輩の皆さん階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が如何に貴重なものかを考えいとおしんで過ごしてください。先生方、親身のご指導有難うございました。・・・略・・・・

先生、地域の人、両親への感謝の言葉を述べています。